

Journal of the International College
for Postgraduate Buddhist Studies
Vol. XXII, 2018

国際仏教学大学院大学研究紀要
第22号（平成30年）

信瑞編『浄土三部経音義集』の書誌的整理
—特に中国国家図書館所蔵本について—

前
島
信
也

信瑞編『浄土三部経音義集』の書誌的整理

―特に中国国家図書館所蔵本について―

前 島 信 也

はじめに

『浄土三部経音義集』は法然の孫弟子である敬西房信瑞^①が嘉禎二年に編纂した、『無量寿経』『観無量寿経』『阿弥陀経』に対する音義書である^②。先行研究ではこの書が既に散逸した典籍を龐大に引用する点に注目してきた。しかしながらこの書に対する書誌的な整理は行われておらず、柴田昭二氏によって諸本の存在と一部の校勘がされるに留まっていた^③。筆者は以前、その先行研究を元に、日本現存の『浄土三部経音義集』の書誌的整理を行った^④。本稿では中国国家図書館所蔵『浄土三部経音義集』の書誌的整理を行い、今後の研究の一助とするものである。

一 中国国家図書館所蔵『浄土三部経音義集』の書誌情報

現在中国国家図書館に所蔵される『浄土三部経音義集』は以下の四本である。

信瑞編『浄土三部経音義集』の書誌的整理（前島）

七

- A 中国国家図書館所蔵本 一九九七番
 - B 中国国家図書館所蔵本 二二三三番
 - C 中国国家図書館所蔵本 三二九一番
 - D 中国国家図書館所蔵本 三二九二番
- まずこの四書の書誌情報について検討する。

A 【中国国家図書館所蔵 一九九七番】^⑤

〔所蔵〕 中国国家図書館

〔形態〕 袋綴装 康熙綴

〔卷数〕 四卷四冊

〔寸法〕 二五・七糎×一六・八糎

〔丁数〕 第一卷五七丁 第二卷五四丁 第三卷三五丁 第四卷二四丁

〔表紙〕 有

〔題簽〕 有

〔外題〕 第一卷「浄土三部経音義卷一」

第二卷「浄土三部経音義卷二」

第三卷「浄土三部経音義卷三」

第四卷「浄土三部経音義卷四」

〔内題〕 第一卷「浄土三部経音義集卷第一 并序」

第二卷 「淨土三部經音義集卷第二」

第三卷 「淨土三部經音義弟三」

第四卷 「淨土三部經音義集卷弟四」

〔尾題〕 第一卷 「淨土三部經音義集卷弟一」

第二卷 無し

第三卷 無し

第四卷 「淨土三部經音義集卷弟四終」

〔字行数〕 半丁 小字一八文字×六行

〔界線〕 無

〔印記〕

① 全卷、一丁才、朱角 「楊屋吾／東瀛所／得秘極」

② 全卷、一丁才、白角 「飛青／閣藏／書印」

③ 卷第一・一丁才、卷第四・二四丁ウ、朱角 「北京／図書／館藏」

④ 一卷裏表紙の紙背

朱角 「高知県／土佐国吾川郡伊野村／製造人町田雄之助」

〔識語〕 第一卷表紙見返し

淨土三部經音義 日本嘉禎三年沙門信瑞撰當中土宋端平二年所云三部者一無量

壽観^{てん}經二卷二觀無量壽經一卷三阿弥陀經其書徵引箇陋遠不如

元應^{げん}慧琳之博瞻然所引東宮切韻中載曹憲王仁煦麻杲薛

信瑞編『淨土三部經音義集』の書誌的整理（前島）

响郭知元祝尚丘陸法言孫恂孫伯韓知十武玄之裴務齊諸人之説其書久佚其見於新唐志者唯武玄韻詮十五卷其陸法言孫恂之

書雜在廣韻中今亦不能別出按日本現在書目載有王仁煦麻杲孫恂孫伯祝尚丘裴務齊韓知十等切韻而薛响郭知玄亦闕与此書旁

注東宮切韻為管丞相之父所作按管名道真為日本名臣當中土唐代知其又所見古書尚有見在書目跡不載替宜兩唐志未云録也

〔書込〕一卷、有、朱

〔備考〕

○題簽・識語・第一卷の書き込みは同筆。

○訓点無し。

○書写の途中から筆が異なる。

○巻第一・一二紙目が二枚重ねになっており、その中に書写間違いと思われるものがある。

○巻第一に錯簡がある。

○巻第三終わりの識語はない。

B 【中国国家図書館所蔵二三三番】

〔所蔵〕 中国国家図書館

〔形態〕 袋綴四ツ目綴

〔巻数〕 四卷三冊

〔寸法〕 二七・四糶×一九・四糶

〔丁数〕 第一卷六四丁 第二卷五九丁 第三卷五五丁

〔表紙〕 有

〔題簽〕 無

〔外題〕 全卷無

〔内題〕 第一卷「浄土三部經音義集卷第一 并序」

第二卷「浄土三部經音義集卷第二」

第三卷「浄土三部經音義集卷第三」

〔尾題〕 第一卷「浄土三部經音義集卷第一」

第二卷「浄土三部經音義集卷第二」

第三卷「浄土三部經音義集卷第四終」

〔字行数〕 半丁 小字二〇文字×一〇行

〔界線〕 無

〔印記〕

① 一 卷一丁才、三卷五五丁ウ、朱角「北京／図書／館蔵」

〔識語〕

卷第三、「観無量寿經音義」終り部分

私此書敬西房之所纂也昔貞祐和尚恐滅絶／

此書令写今写畢以此功回楽邦云

信瑞編『浄土三部經音義集』の書誌的整理（前島）

〔書込〕 全卷 有、朱

〔備考〕

○一巻二七紙、二八紙目の間に挟み込みの紙有り。これは三二九一と同じもの

C 【中国国家図書館所蔵三一九一本】

〔所蔵〕 中国国家図書館

〔形態〕 袋綴装四ツ目綴

〔巻数〕 四卷三冊

〔寸法〕 二八・七糎×一九・四糎

〔丁数〕 第一巻六二丁 第二巻五九丁 第三巻五五丁

〔表紙〕 有

〔題簽〕 無

〔外題〕 第一巻「浄土三部経音義集卷一」

第二巻「浄土三部経音義集卷二」

第三巻「浄土三部経音義集卷三四終」

〔内題〕 第一巻「浄土三部経音義集卷第一 并序」

第二巻「浄土三部経音義集卷第二」

第三巻「浄土三部経音義集第三」

〔尾題〕 第一巻「浄土三部経音義集卷第一」

第二卷「浄土三部經音義集卷第二」

第三卷「浄土三部經音義集卷第四終」

〔字行数〕半丁 小字二〇文字×一〇行

〔界線〕無

〔印記〕

- ① 全卷、一丁才、朱角「星吾海／外訪得／秘笈」
- ② 全卷、一丁才、朱角「門外／不出／寶輪窟」
- ③ 全卷、一丁才、朱角「松坡図書館藏」
- ④ 卷第一・一丁才、卷第四・五五丁ウ、朱角「北京／図書／館藏」
- ⑤ 卷第一、一丁才、白角「楊印／守敬」
- ⑥ 卷第一、一丁才、白角「宣都／楊氏藏／書記」

〔識語〕

私此書敬西房之所纂也昔貞諾和尚恐滅絶投

此書令写今写畢以此功回樂邦云

〔書込〕一卷 有、墨・朱

〔備考〕

○第一卷一紙目に楊守敬の写真と二箇所に印記あり。印記の内容は、

右上 朱角「星吾七／十歳小像」

左下 白角「楊印／守敬」、⑤と同じもの

信瑞編『浄土三部經音義集』の書誌的整理（前島）

信瑞編『浄土三部經音義集』の書誌的整理（前島）

七

○「右邊三匝」の項に一紙の綴じあり。

○卷第二・一四丁ウからところどころ書写者が異なるように見える。

○虫よけの公孫樹の葉の挟み込みあり。

○訓点・仮名あり。

D 【中国国家図書館所蔵三一九二本】

〔所蔵〕 中国国家図書館

〔形態〕 袋綴装四ツ目綴

〔卷数〕 四卷三冊

〔寸法〕 二七・八糎×一八・八糎

〔丁数〕 第一卷六三丁 第二卷五八丁 第三卷五四丁

〔表紙〕 有

〔題簽〕 無

〔外題〕 全卷無し

〔内題〕 第一卷「浄土三部經音義集卷第一 并序」

第二卷「浄土三部經音義集卷第二」

第三卷「浄土三部經音義集卷第三」

〔尾題〕 第一卷「浄土三部經音義集卷第一」

第二卷「浄土三部經音義集卷第二」

第三卷「浄土三部経音義集卷第四終」

〔字行数〕半丁 小字一〇行×二〇文字

〔界線〕無

〔印記〕

- ① 全卷、一丁才、朱角「松坡図書館蔵」
- ② 一卷、一丁才、白角「朱師／轍觀」
- ③ 一卷、一丁才、白角「飛青／閣蔵／書印」
- ④ 一卷一丁才、四卷五四丁ウ、朱角「北京／図書／館蔵」

〔識語〕

私此書敬西房之所纂也昔貞諾和尚恐滅絶投

此書令写今写畢以此功回楽邦云

〔書込〕一卷 有、墨

〔備考〕

○第一卷一紙目に楊守敬の写真と二箇所に印記あり。

右上、朱「星吾七十歳小象」

左下、白角「楊印／守敬」

○「右邊三匠」の項に一紙の綴じあり。これは三一九一と同じもの。

以上が中国国家図書館所蔵本における書誌情報である。この点を踏まえて以下の問題点について検討する。

- 一、中国に『浄土三部経音義集』が存在する理由
- 二、四本の関係性
- 三、日本の所蔵本との関係
- 四、「上海刊本」との関係

二 中国に『浄土三部経音義集』が存在する理由

これについては、中国の学者・書家であった楊守敬（一八三九―一九一五）が日本で蒐集し、中国に持ち込んだことが結論づけられる。以下にその根拠を示す。

二・一 印記

- A ①「楊星吾／東瀛所／得秘極」、②「飛青／閣藏／書印」
- C ①「星吾海／外訪得／秘笈」⑤「楊守／敬印」⑥「宣都／楊氏藏／書記」
- D ③「飛青／閣藏／書印」

これらは全て楊守敬の蔵書印である。楊守敬は『国史大辞典』には以下のようにある。

清末・民国初期の学者・書家である。（中略）明治十三年（一八八〇）、清国出使日本大臣何如璋の招きに応じて来日、日下部鳴鶴、巖谷一六、松田雪柯らに北波の書法を伝えた。その傍ら中国で亡逸し、日本にのみ伝存する善本古書を調査蒐集し、『古逸叢書』を編輯した。明治十七年に帰国（後略）

つまり、この『浄土三部経音義集』は楊守敬が日本滞在時に蒐集した典籍の一つであると推定できる。

二・二 肖像写真

C・Dの巻第一の見返しには楊守敬の七十歳の頃の肖像写真が貼り付けられている。この写真がどの時期に付されたかは不明ながらも、楊守敬関係の典籍であることを示している。

二・三 識語

この四冊の識語に二種類ある。まずAの表紙見返しに記された墨書の識語である。これはAの外題の筆と非常に似通っているため、同一人物の筆であると考えられる。

また、現在未調査であるが台湾国家図書館に楊守敬自筆の識語を持つ『浄土三部経音義集』が存在する。この識語部分の影印が『國立中央図書館善本題跋真跡』に収録されている。^①

浄土三部経音義四巻日本沙門信

瑞纂自序題嘉禎三年當宋理宗端平三年也卷一卷

二為無量壽觀經卷三為觀無量壽

經卷四為阿弥陀經其引廣韻則陸

法言孫恂分著引玉篇亦時見野玉案語

是其所見古本与今殊異又所引東宮切

韻中載郭知玄薛岫麻杲韓知十祝

尚邱武玄之王仁煦等之説皆唐以前

小學書之散逸者其見於新舊唐志者

信瑞編『浄土三部経音義集』の書誌的整理（前島）

不過數家飯多見其国現在書目祇卷

惧無多國當与玄應慧琳家経音義并

珍也。光緒癸未春三月宜都楊守敬記

于東京使館

是書引東宮切韻旁注云是書之作菅丞相

之父也。管名道真為彼國名臣。當中国唐之中葉惜

其書不傳也○此書彼國藏書家亦不知之 余従書肆得此／本 手拝再記

この筆とAの識語の筆は一致し、その内容も近しいため、Aの識語も楊守敬自筆であると判ずることができる。そしてもう一つの識語は卷第三の最後に付されたもので、B・C・D全て同じ識語であることから、同一の底本から書写されたものであると判断できる。これについては次の四本の関係性の項で述べる。

二・四 楊守敬著作

楊守敬の著作の一つに『日本訪書志』^⑧がある。これは、楊守敬が在留四年の間に、わが国で収集し、あるいは各地で見た宋・元・明の古版本、および日本の漢籍古鈔本・古版本二百五十三部について解説したものであり、この中に『浄土三部経音義集』の項目がある。^⑨

以上のことから少なくとも、A・C・Dは楊守敬の所蔵であったことが結論づけられる。Bについても共通の識語を有することから、C・Dどちらかの書写本であると推定できる。

三 四本の関係性

では次いでこれら四本の関係性について検討する。これについては訓点・識語・印記・内容という点から検討する。

三・一 訓点

これら四本の内、訓点が付されているものはCのみである。またCの印記②「門外不出・寶輪窟」^⑩から、元々は日本寺院の所蔵本と考えられ、日本所蔵本を楊守敬が購入したものであると推定できる。

他の三本には訓点が付されていないため、書写の際の省略、もしくは訓点を必要としない人物、恐らくは中国人による書写であることが推定できる。

三・二 識語

識語は先にも示したようにAの楊守敬直筆の物と、B・C・Dの第三卷最後にある識語の二種がある。三・一からCが元々日本蔵書本であると考えられるため、B・Dはその書写本であると推定できる。Aは卷第三の識語が無く、Cとは別の本からの書写、もしくは第三卷の識語部分のみを省略した書写本であると考えられる。この点については三・四の内容比較の中で検討を行う。

三・三 印記

先にも確認したように、四本の印記の数は異なる。最も多いのがCの計六箇所、次いでA・Dの四箇所、最も少ないのがBの一箇所である。

先に示したように、Aの①②、Cの①⑤⑥、Dの③はいずれも楊守敬藏書を示すものであり、Cの②は日本寺院の所蔵印である。また全冊に共通する「北京図書館」の藏書印は、一九五〇～一九九八の間の中国国家図書館の名称であるから、その間に蔵されていた図書であることを示しており、この時点で四本は全てここに所蔵されたことになる。

A④の印記は紙背にあり、この紙自体が日本のものであることを示す。しかし、書写がどの段階でされたかは不明だが、恐らくは楊守敬の跋文があることから、書写する際に日本の製作された紙を使用したと推定できる。

次いでC③、D①にある「松坡図書館蔵」の印記である。これは、楊守敬の藏書が現在の中国国家図書館に所蔵される経緯に関係する。この点について傅璇琮氏は「中国国家図書館所蔵日本版古籍について」の中で「中国国家図書館と楊守敬藏書との関係を以下のように述べる。¹¹⁾

一九一五年に楊氏が亡くなり、次の年から楊氏藏書を譲渡する話が出た。ちょうどこの時、袁世凱の帝政に強く反対した蔡鏗が病気で亡くなった。社会各界は彼を記念するために、蔡鏗の字松坡を取って、北海快雪堂で「松坡図書館」を創立し、社会各界より図書を収集していた。楊氏藏書の一部分はここに入蔵した。一九五〇年国立北平図書館は松坡図書館と合併し、北京図書館と名付けられた。楊守敬が松坡図書館に売った古籍はここに入蔵した。

つまり、このC・Dについては松坡図書館を通して北京図書館へ所蔵されたことになる。また、高橋智「台湾故宫博物院所蔵 楊守敬観海堂旧蔵日本室町時代鈔本「論語集解」について¹²⁾」の中で、楊守敬藏書の所蔵の流れを

示しており、その中で楊守敬の死後、その蔵書が「松坡図書館」以外にも故宮に所蔵されたことから、Aは故宮に所蔵された可能性が高い。

最後にD②の蔵書印であるが、これは「朱師轍」という人物の蔵書印であると考えられる¹³⁾。Dのみにこれが付される理由は不明だが、松坡図書館に所蔵されてから移動するとは考え難いため、楊守敬存命中に朱師轍が所持し、後に松坡図書館に入蔵されたと推定できる¹⁴⁾。

以上の点から、四本は以下の関係性を推定できる。

まずAは楊守敬の直筆の識語があるが、他の三本と共通の識語を有していないため、一先ず別本として扱う。また、「松坡図書館」の蔵書印が無い¹⁵⁾ため、故宮を通して北京図書館に入蔵したものと推定できる。

次いでBには訓点が付されていない点から中国人によって書写された可能性が高く、Cを書写した蓋然性が高い。また「北京図書館」の所蔵印のみが存在するため、「北平図書館」と「松坡図書館」が合併し、「北京図書館」となった後に書写された可能性が高い。

Cは印記と訓点から、日本で書写され日本の寺院で所蔵されていたものを楊守敬が購入したものであると考えられ、楊守敬が亡くなった後に「松坡図書館」へ入蔵されたと考えられる。

DはCの書写本と推定できるが、「松坡図書館」に所蔵される以前に朱師観という人物が所持していたと考えられる。

三・四 内容比較

では、これら四本の内容の比較を行う（後付の資料参照）。これはA・B・DはCの書写本であるかどうかとい

う点に注目して検討を行うため、Cを基底とし、その中で傍注・誤写等に注目し、それらがどのように他本で反映されているかを検討する。

- 一、今回の調査は巻第一のみを調査する。これはAの特徴たる独自の注記が巻第一のみに見られることによる。
- 一、比較資料は全ページを複写していない関係上、丁数ではなく採取された項目名を示す。
- 一、Cの中で見せ消ちとして墨塗で記述される箇所は「■」で示す。
- 一、Cの中で訂正、もしくは補入されている文字は、訂正前の文字を示した後で「（ ）」にて注の箇所と内容とを共に示す。（傍注・傍、頭注・頭、脚注・脚、訂正・訂、補入・加、その他・他）例、「厚」に訂正符と傍注で正しい文字「原」が示される場合「厚」（傍訂「原」）
- 一、Cの中で見せ消ち、訂正等が反映されている場合は「○」、反映されず注記もない場合は「×」、その他の場合はその都度示す。
- 一、C以外の本に付される注記についてもその都度示し、セルに網かけを施した。
- 一、典拠を示す内容と考えられるものここでは取り上げない。

まず、Aの特徴から述べる。分類すると以下の通りである。

- ① Cの注記を反映している 四一箇所
- ② Cの注記を反映していない 一二箇所
- ③ Cには無い注記 三七箇所

Aは①のようにCの注記の多くを反映しているが、後半になるにつれ②のように反映しない箇所が増える。特に

「已上経音」といった、内容に追記するものについては省略する傾向が強い。

③はCと関連しないが、これらの多く(二五箇所)は書写による誤字、特に誤写を訂正するものである。その他(一二箇所)は表記・内容に関する注記である。特に序文に付される注記は序文の構成を踏まえた上で検討している点に注目される¹⁶⁾。また、この注記は外題や表紙見返の筆と近いいため、楊守敬自身が施したものと推定できる。

以上の点から、AはCを書写したものであると推定できる。

次いでBについて検討したい。

- ① Cの注記をそのまま書写したもの 三六箇所
- ② Cの注記を反映したもの 四箇所
- ③ Cの注記を反映していないもの 一二箇所
- ④ Aの注記と関連する箇所 ○箇所
- ⑤ その他 一箇所

まず①・②から、Cを直接書写していることが明らかである。これは、Cの墨塗り訂正箇所を空欄で示し、行取り・字取りをCと合わせている点からも裏付けられる。③に見られる注記を訂正しない箇所も多いが、後半につれ多くなるというわけではないため、書写忘れ、もしくは意味の取れないものは書写をしなかったと考えられる。また、④のようにAの注記を反映していないため、Aとは関係なく書写されたと判断できる。⑤については、Cの書写者が訓点を判断できなかったことから生じた相違と考えられる。Cでの訂正箇所は以下のように表記されている。

世界劫 機文氏 ス陀若

この地の文章にある合略仮名が含まれた「ストモ」を読むことができず、形の似た「盡」を記したと考えられる。

次いでDである。

- ① Cの注記をそのまま書写したもの 三・八箇所
- ② Cの注記を反映したもの 五箇所
- ③ Cの注記を反映していないもの 一・二箇所
- ④ Aの注記と関連する箇所 一箇所
- ⑤ Cには無い注記 七箇所

相違箇所についてはBと非常と似通っている。まず①・②、そして墨塗り訂正箇所に対する書写の姿勢、行取り字取りから、Bと同様にCを書写したことは明らかである。しかし①・②の内容、③の注記内容が同一ではないことから、Bとは関係なく独自にCを書写したと考えられる。そして、④のAと関連する注記が一箇所、序文の箇所に存在する（傍加「而」）。この注記は序文の構成について符したものであり、この指摘によって以下のように対句が成立する箇所である。

述《而》不作是則尼父之格言也

困而略纂豈非鄙生之懇志乎

ただし、この箇所は中国国家図書館本以外の諸本には正しく記されていることから、この一点を以ってAを踏まえたかと判ずるには難しい。さらには⑤のように独自に注記を施した箇所が七箇所（全て誤写訂正）あるため、今回の検討ではこの④も独自に注記をふったものと判断する。

以上の点から、中国国家図書館所蔵本の四本はC本を底本としてそれぞれ書写されたものであると結論づけられる。ただし、本論では台湾の国家図書館所蔵本との関連性までは指摘することは叶わなかった。この書も楊守敬所持本でありながら訓点が付されているため、この書の閲覧ができ次第、比較調査を行いたい。

四 日本の所蔵本との関係

次に、日本に現存する諸本との関係性を体裁・識語の点から検討する。

四・一 体裁

中国国家図書館所蔵本は全て經典採取文字を大字、注記内容を小字で記述する体裁をとる。¹⁷これは日本の所蔵本の中で、「大谷大学所蔵本」(以下「大谷本」)、「佛敎大学図書館所蔵本」(以下「佛大本」)、二〇一七年古典籍展観大入札会で出品された新出写本(以下、個人蔵本)¹⁸とも一致する。ただし、B・C・Dのように行取り字取りまで一致するものはない。

四・二 識語

B・C・Dに共通して存在する識語は、先の体裁と同様に「大谷本」、「佛大本」、「個人蔵本」と共通する。つまり、この識語を有するものは全て同一系統の書写本であると結論づけられる。ただし「個人蔵本」は未検討であるものの、「大谷本」には序文が無く、「佛大本」には引用典拠を示す注記が多く付されていることから、同一

系統としながらも、その内容には大きなばらつきがあることが指摘できる。全て底本が同一のものであることは間違いないものの、これら同系統の中で比較検討を行い、書写段階の推定と底本に最も近いものを指摘する必要がある。これは別稿に改めたい。

五 「上海刊本」との関係

最後に「上海刊本」との関係について検討したい。この翻刻本は、国会図書館旧亀田文庫本を始めとして、多くの機関で所蔵される唯一の活字本である。水谷真成『中國語史研究』¹⁹の仏典音義書目の中で「羅振玉刊富晋社本」と示すものがこれにあたりと考えられ²¹。岡田希雄氏は、「浄土三部経音義攷」の中で、国会図書館本の元の所有者である亀田次郎氏から羅振玉によって上海で刊行されたものと伝え聞いているようである²²。この活字本には出版等の情報はなく、訓点等も一切無い。しかし、第三巻の終わりに「大谷本」やCと同様の識語があるため²³、この系統本を翻刻したものである。また楊守敬と羅振玉の交流の深さから、この翻刻本は、楊守敬の所持していた物を元に翻刻したものである蓋然性が高く、Cもしくは台湾国家図書館所蔵本を元に刊行されたと考えられる²⁴。

おわりに

以上、信瑞編『浄土三部経音義集』の中国国家図書館所蔵本を中心に書誌的整理を行った。その結果、ここに所蔵される四本はCを底本として書写されたものであること、特にAについては楊守敬が独自に注記を付したものであることが結論づけられた。また、日本の所蔵本である「大谷本」「佛大本」「個人蔵本」と同一系統本であ

り、さらには「台湾国家図書館所蔵本」とも関連が深いことをも結論づけた。これらの系統本の中での書写段階、書写原本の想定を今後の課題としたい。

註

(1) 信瑞。？～一二七九。隆寛・信空の弟子。『明義進行集』『広疑瑞決集』等を著述し、『四十八巻伝』には法然の伝記を作成した旨が記されるが、それ以外の経歴等は一切不明。

(2) 「音義書」とは『国史大辞典』によると、

本邦所撰の音義は、訓詁学・音韻学・悉曇学の顕現と見られる面が多く、また一方古辞書類との間にも相互に密接な影響関係があり、国語史料としては言うまでもなく、訓詁史・音韻史・辞書史の資料としても重要である。(「音義」項)

とある。

(3) 柴田昭二「信瑞纂浄土三部経音義集について」(『香川大学国文研究』一〇、一九八五)。

(4) 前島信也「信瑞纂『浄土三部経音義集』の書誌的整理——特に日本現存本について——」(『印度學佛教學研究』六五・二、二〇一七、一〇〇～一二三頁)。

(5) なお、外題や識語等は原則、原文のままに表記し、現行のフォントで表記できないものに関しては新字に改めた。また、文字訂正などの校正符があったものについては、校正を踏まえた上で翻刻した。

(6) 渡辺守邦・後藤憲二共編『増訂新編蔵書印譜』中(日本書誌学大系一〇三・二、青裳堂書店、二〇一四)一〇五二頁。にA①・C①がある。その他のものは国文学研究資料館の蔵書印データベースに確認できる。

(7) 『国立中央図書館善本題跋真跡』(国立中央図書館、一九八二)三巻、一八〇六～一八〇七頁。

信瑞編『浄土三部経音義集』の書誌的整理(前島)

- (8) 『日本訪書志』…わが国に伝存する漢籍の古鈔本・古版本を解説した書。清、楊守敬著。十六卷、八冊。光緒二十三年（一八九七）刊。（中略）楊守敬が、在留四年の間に、わが国で収集し、あるいは各地で見た宋・元・明の古版本、および日本の漢籍古鈔本・古版本二百五十三部について解説したもので、書名・版式・序跋・伝来・内容などを詳細に記録している。（『国史大辞典』一巻、二三四頁）
- (9) 《統修四庫全書》編纂委員会編『統修四庫全書』九三〇・史部・目錄類（上海古籍出版社、出版年不明）五三九～五四一頁。
- (10) 渡辺守邦・後藤憲二共編『増訂新編藏書印譜』、宮内庁書陵部『図書寮叢刊 書陵部藏書印譜』上下（宮内庁書陵部、一九九六・一九九七）、国文学研究資料館藏書印データベースには該当なし。
- (11) 『中国に伝存の日本関係典籍と文化財―国際シンポジウム 第17集』（国際日本文化研究センター、二〇〇二）八三頁。
- (12) 二〇〇五年度 財団法人交流協会日台交流センター歴史研究者交流事業報告書
[https://www.koryu.or.jp/08_03_03_01_middle.nsf/1384a27fc6686a1a49256798000a6246/01b2857ae216540149257392001e0449/\\$FILE/takahashisatoshi2.pdf](https://www.koryu.or.jp/08_03_03_01_middle.nsf/1384a27fc6686a1a49256798000a6246/01b2857ae216540149257392001e0449/$FILE/takahashisatoshi2.pdf)（二〇一七年五月一日閲覧）
- (13) 朱師轍は詳細不明。『中国人名辞典』（日外アソシエーツ）『東洋人物レファレンス事典』（日外アソシエーツ）等には該当無し。インターネット上の検索ではウィキペディアに頁が存在する。<https://zh.wikipedia.org/wiki/%E6%9C%B1%E5%B8%88%E8%BE%99>（二〇一七年五月一日閲覧）
- (14) なお、北京国家図書館には楊守敬と朱師轍の印記を持つ典籍が他にも多数ある。例として『尚書』の物を示す。
http://opac.nlc.cn/F/XG3EE3EPRHHHP5LCN8N4PDV7MLK4XP96R66NYTE472583LSA-04102?func=full-set-set&se_t_number=211606&set_entry=000001&format=999（二〇一七年五月一日閲覧）
- (15) 北京での調査によって全巻の熟覧を行ったが、紙焼きにできたものはその中の一部である。そのため、それぞれの巻

頭、巻尾に集中してしまうことをご理解頂きたい。

(16) 信瑞の序文はほぼ対句表現によって構成されており、これを踏まえて注記を施したと考えられる。幾つか確認したい。

【頭注「風下当脱四字」】

この注記に従うと以下ようになる。

當機皆潤法雨有縁

盡煦慧風《○○○○》

「当」と「盡」、「潤」と「風」を対応させる配置にするためには風の下に四文字が無いと成立しないため、この注記を施したと考えられるが、以下のような対句構成が妥当であると考えられ、この注記は不当である。

當機皆潤法雨。

有縁盡煦慧風。

「当機」と「有縁」、「皆」と「盡」、「潤」と「煦」、「法雨」と「慧風」と対応しており、ここで指摘される四文字は必要無いことが確認できる。

【逾病（傍加・於）重疑】

この注記に従うと以下ようになる。

諸老俊彦弗蔵於積謬

童蒙孱囂逾病《於》重疑

「於」があることで、この箇所は対句表現が成り立つため、ここでの指摘は妥当である。

(17) 前出拙稿ではこの形式を「経文二行取系統」と呼称する。

(18) この本は執筆者が落札し所蔵している。この一本に関する研究は別稿に改めたい。

信瑞編『浄土三部経音義集』の書誌的整理（前島）

信瑞編『浄土三部経音義集』の書誌的整理（前島）

九四

(19) 前出拙稿参照。

(20) 水谷真成『中國語史研究—中國語學とインド學との接點—』（三省堂、一九九四）。

(21) 同右、二二頁。

(22) 『龍谷学報』三三二四、一九三九、三三三頁。

また、『統浄土宗全書』の宗書保存会会報第十七（昭和三年発行）では、『統浄土宗全書』第四卷翻刻本の底本として、「近年上海にて刊行を見たるも」とあることから、一九二八年より以前に刊行されたものである。

(23) 但し、富山市立図書館所蔵の活字本には北京の「富普書社」なる印記が押されている。

(24) 此書敬西房之所纂也昔真諾和尚恐滅マママ施投マママ

此書令寫今寫畢以此功回樂邦云

(25) 「楊守敬と羅振玉との交友について」（『書論』第三十二号、二〇〇一、一二六—一三八頁）に楊守敬と羅振玉との関係について述べられている。

信瑞編『浄土三部経音義集』の書誌的整理（前島）

出典	C	A	B	D
序文	厚（傍訂・「原」夫	○	×	○
序文	生■之流伝	○	（空欄）	（古）
序文	惠風而	惠風而（頭他・「風下当脱四字」）	惠風而	惠風而
序文	梵■天所制	○	（空欄）	（古）
序文	自古以還	自古以還（傍加・「雜」）	自古以還	自古以還
序文	点画微不同	点尽（傍加・「画」）微不同	点画微不同	点画微不同
序文	漢家靈龜	漢家靈龜	漢家靈龜	漢家靈（傍訂「靈」）龜
序文	丹山之雲	丹山（傍加・「之」）雲	丹山之雲	丹山之雲
序文	施人庸	施人庸（傍他・「△△」）	施人庸	施人庸
序文	指南也	指南也	指南也	指百（傍訂「南」）也
序文	仏之闢	仏之闢（傍頭・「闢」）	仏之闢	仏之闢
序文	魚魯致垂	魚魯致垂（傍訂・「乖」）	魚魯致垂	魚魯致垂
序文	童蒙厚壽	童蒙厚壽（傍訂・「器」）	童蒙厚壽	童蒙厚壽
序文	逾病重疑	逾病（傍加・「於」）重疑	逾病重疑	逾病重疑
序文	語（傍加・「誤」）義失	○	語（傍加・「誤」）義失	×
序文	（傍加・「義失」）理乖	○	（傍加・「義失」）理乖	（傍加・「義失」）理乖
序文	（傍加・「理乖」）寡益	○	（傍加・「理乖」）寡益	×
序文	其差舛	其差舛（傍訂・「舛」）	其差舛	其差舛
序文	乎嗟	乎嗟	乎嗟	早（傍訂「呼」）嗟
序文	相応之註尺	相応之註尺（傍訂・「釈」）	相応之註尺	相応之註尺
序文	蓋述不作	蓋述（傍訂・「而」）不作	蓋述不作	蓋述（傍訂・「而」）不作
序文	為識	為識（傍加・「一字」）	為識	為識
序文	敷淺	敷淺（傍加・「之身」）	敷淺	敷淺
一卷・仏	（傍他・「是善之作管烝相父也」）	是善（傍訂・「書」）之作管烝相父也	（傍他・「是善之作管烝相父也」）	×

一卷・王舍城	智度論	智度(空欄)	智度論	智度論
一卷・經	庶令同出	庶(傍訂「庶」)令同出	庶令同出	庶令同出
一卷・經	○	○	○	○
一卷・經	貫常則当(傍訂「道」)	○	○	○
一卷・經	真■(傍訂「正」)不雜	○	二翻論(空欄)	二翻論(点)
一卷・經	二翻論■	○	二翻論(空欄)	二翻論(点)
一卷・經	摭華云	摭(傍訂「摭」)華云	摭華云	摭華云
一卷・經	素怛覽	素怛覽	素怛覽	素怛覽(傍訂「覽」)
一卷・經	在胡神生	在(傍他「△」)胡神生 (頭他「在当伝有」)	在胡神生	在胡神生
一卷・經	金人丈余	金人丈余(傍訂「餘」)	金人丈余	金人丈余
一卷・經	仏留教	仏留教(傍訂「教」)	仏留教	仏留教
一卷・經	文籍之教	文籍之教(傍他「△」)	文籍之教	文籍之教
一卷・經	經 千古靈	經 古(傍訂「古」)靈	經 千古靈	(点)
一卷・無量寿	(傍加・「已上經音也」)	○	×	(傍加・「已上經音也」)
一卷・說	(頭他・「尺名四」之也)	×	×	×
一卷・說	尺名曰	尺(傍訂「尺」)名曰	尺名曰	尺名曰
一卷・仏	於(傍脚「一切法」)一切種相	○	於(傍脚「一切法」)一切種相	×
一卷・仏	老■能少	○	老(空欄)能少	(点)
一卷・仏	能(傍脚・「小能大能圓能方能」)	○	能(傍脚・「小能大能圓能方能」)	×
一卷・仏	(傍加・「或存」)或亡	○	(傍加・「或存」)或亡	×
一卷・仏	分身散体	分身散体(傍訂「體」)	分身散体	分身散体
一卷・仏	悦忽變化	悦忽(傍訂・「忽」)變化	悦忽變化	悦忽變化
一卷・仏	祝尚丘	祝尚丘(傍訂・「丘」)	祝尚丘	祝尚丘
一卷・仏	無(傍加・「所」)去來	○	無(傍加・「所」)去來	無(傍加・「所」)去來
一卷・仏	仏道沖妙	仏道沖妙	仏道沖妙	仏道沖妙(傍訂「妙」)

出典	C	A	B	D
一卷・眷闍崛山	又云鸞峰（傍加「又云鸞峯」）	○	×	又云鸞峰（傍加「又云鸞峯」）
一卷・眷闍崛山	此山既栖（傍訂「棲」）	○	×	×
一卷・眷闍崛山	此鳥有靈	此鳥有（傍頭「有影作色」）靈	此鳥有靈	此鳥有靈
一卷・眷闍崛山	人（傍加「欲」）死時	○	×	人（傍加「欲」）死時
一卷・眷闍崛山	此（傍加「能」）懸知	○	此（傍加「能」）懸知	此（傍加「能」）懸知
一卷・眷闍崛山	娑音	娑（傍訂「崛」）音	娑音	娑音
一卷・眷闍崛山	渠乙反（傍加「以上経音」）	○	渠乙反（傍加「以上経音」）	渠乙反（傍加「以上経音」）
一卷・眷闍崛山	世界劫■（傍訂「燒」）	○	世界劫燒尽	世界如（傍訂「劫」）燒
一卷・一切	漢書一切	漢書（頭他「書疑切字誤」）	漢書一切	漢書一切
一卷・已達	（傍加「達」）通也	○	（傍加「達」）通也	（傍加「達」）通也
一卷・已達	孔安国注	孔安国法（傍訂「注」）	孔安国注	孔安国注
一卷・尊者	典礼曰	典（傍訂「曲」）礼曰	典礼曰	典礼曰
一卷・菩薩	菩（傍加「薄胡普也薩」）桑割濟也	○	○	菩（傍加「薄胡普也薩」）桑割濟也
一卷・菩薩	菩提（傍加「薩埵」）	○	菩提（傍加「薩埵」）	菩提（傍加「薩埵」）
一卷・菩薩	菩■（傍訂「提」）	○	○	○
一卷・正士	紂惡者（傍訂「士」）也	○	×	×
一卷・正士	以淳善謹	以淳（傍訂「渴」）善謹	以淳善謹	以淳善謹
一卷・正士	輕忽身命	輕忽（傍訂「忽」）身命	輕忽身命	輕忽身命
一卷・皆遵	古文作遵（傍イ「遵」）	○	×	×
一卷・兜率	兜卒	兜卒（傍訂「率」）	兜卒	兜卒
一卷・兜率	花△経	花△（傍訂「嚴」）経	花△経	花△経
一卷・兜率	此曰喜樂	此曰嘉（傍訂「喜」）樂	此曰喜樂	此曰喜樂
一卷・震動	（傍加「掉也掉」）亦動也	○	×	×
一卷・算計	隸（傍加「首」）作数	○	隸（傍加「首」）作数	隸（傍加「首」）作数
一卷・算計	又作竿	又作竿（傍訂「竿」）	又作竿	又作竿

一卷・錠光	云(傍加「華嚴經」)	○	云(傍加「華嚴經」)	云(傍加「華嚴經」)
一卷・錠光	案(傍他「已下十一字本無」)(左傍「今檢標指抄中六十六丁引此文若是異本歟」聲類)	○	案(傍他「已下十一字本無」)(左傍「今檢標指抄中六十六丁引此文若是異本歟」聲類)	案(傍他「已下十一字本無」)(左傍「今檢標指抄中六十六丁引此文若是異本歟」聲類)
一卷・錠光	梵音(傍加「已上經音」) 翻譯	×	梵音(傍加「已上經音」) 翻譯	梵音(傍加「已上經音」) 翻譯
一卷・錠光	如燃(傍他「何分」)	×	如燃(傍他「何分」)	如燃(傍他「何分」)
一卷・錠光	灯(傍訂「灯」) 故	○	灯(傍訂「灯」) 故	×
一卷・錠光	名燃征(傍訂「灯」)	○	名燃征(傍訂「灯」)	○
一卷・錠光	曰灯(点)	○	曰灯(空欄)	曰灯(点)
一卷・沙門	桑門(傍加「或云：那拿」)	○	桑門(傍加「或云：那拿」)	桑門(傍加「或云：那拿」)
一卷・勇哲	爾雅(傍加「已下爾雅」)	○	爾雅(傍加「已下爾雅」)	爾雅(傍加「已下爾雅」)
一卷・勇哲	則哲(傍加「方言：為哲」)	○	則哲(空欄)(傍加「方言：為哲」)	則哲(空欄)(傍加「方言：為哲」)
一卷・勇哲	哲(傍加「謂」) 明了也	○	×	哲(傍加「謂」) 明了也
一卷・稽首	稽首(傍加「頭首：稽首」)	○	稽首(傍加「頭首：稽首」)	稽首(傍加「頭首：稽首」)
一卷・稽首	是也(傍加「已上經音」)	×	是也(傍加「已上經音」)	是也(傍加「已上經音」)
一卷・右邊三匝	寄婦伝(傍他「委文札紙イタス」)	×	寄婦伝(傍他「委文札紙」)	寄婦伝(傍他「委文札紙イタス」)
一卷・右邊三匝	(別紙)	×	(別紙)	(別紙)
以頌	(頭注「頌左伝：神明矣」)	×	(頭注「頌左伝：神明矣」)	(頭注「頌左伝：神明矣」)
以頌	或云(傍他「已下十一：尤眩」)	×	或云(傍他「已下十一：尤眩」)	或云(傍他「已下十一：尤眩」)
以頌	伽(傍他「准西域：音訛也」) 陀訛	×	伽(傍他「准西域：音訛也」) 陀訛	伽(傍他「准西域：音訛也」) 陀訛
以頌	偈者(傍加「亦」) 伽陀	○	偈者(傍加「亦」) 伽陀	偈者(傍加「亦」) 伽陀
以頌	慈(傍加「已上音義」) 恩伝	×	×	慈(傍加「已上音義」) 恩伝
青白玄黄朱紫	云白色(傍加「西方：黒色」)	○	云白色(傍加「西方：黒色」)	云白色(傍加「西方：黒色」)
青白玄黄朱紫	中英(傍訂「央」)	×	中英(傍訂「央」)	中英(傍訂「央」)

Summary

Bibliographic Considerations of “*Jōdosanbukyō-ongi-shū*” 浄土三部経音義集 Compiled by Shinzui 信瑞 : In Particular about Its Various Manuscripts in China.

MAEJIMA Shin'ya

“*Jōdosanbukyō-ongi-shū*” 浄土三部経音義集 was written in 1237 by Kyōsaibō-Shinzui 敬西房信瑞 who studied under one of Honen's disciples. It explains the readings and meanings of Chinese characters appearing in the three Pure Land Sutras.

There are a total of four manuscripts, A, B, C and D in The National Library of China (NLC). In this paper, we discuss why they are kept in NLC, their relationships with each other, other manuscripts in Japan, and a book published in Shanghai.

First of all, it is concluded that the reason why they are kept in NLC is that they were brought in by a calligrapher, Yang Shoujing 楊守敬. There are three reasons. Firstly, there are his stamps in three out of four manuscripts, A, C, and D; Secondly, a photograph of him is affixed to two of those three manuscripts, C and D; Thirdly, his postscript is written in the other one of the three manuscripts, A. Therefore, at least three of the four manuscripts were owned by him.

Next is the relationships between the four manuscripts. Manuscript C was purchased in Japan by Yang Shoujing. Because there are ownership stamps of the temple in Japan, Japanese punctuation marks and alphabet, Kana. It is obvious that the other three manuscripts copied manuscript C because their explanatory notes match. In particular, manuscripts B and D have the same number of lines on each page, the same number of

characters on each line and the same postscript as manuscript C. Although manuscript A does not have the same postscript as manuscript C has, it reflects the notes of manuscript C. So, it is concluded that all three manuscripts copied manuscript C as the base manuscript.

Regarding the relationships with other manuscripts in Japan, three manuscripts owned by Otani University, Bukkyo University, and an individual are of the same lineage as the four manuscripts in NLC in terms of the page format and the postscripts of the manuscripts.

Finally, on the relationship between manuscripts in NLC and the book said to have been published by Luo Zhenyu 羅振玉 in Shanghai, it is inferred that the latter was published based on the former because there was a relationship between Yang Shoujing and Luo Zhenyu.

*Research Fellow,
Research Institute for Old Japanese
Manuscripts of Buddhist Scriptures,
International College
for Postgraduate Buddhist Studies*